

研究 報告

国内におけるネギハモグリバエ（バイオタイプB）の急激な分布拡大と優占

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
野菜花き研究部門

うらいり ちひろ ふじと さとし
浦入 千宗・藤戸 聡史

はじめに

ネギハモグリバエ *Liriomyza chinensis* (Kato) (ハエ目：ハモグリバエ科) は高温期に多発するネギ類（ネギ、タマネギ、ニンニク、ニラ、ラッキョウ等）の重要害虫であり、日本をはじめとする東アジアや東南アジア（SPENCER, 1973；1990；ANDERSEN et al., 2002；CHEN et al., 2003；CHOI et al., 2003；SHIAO, 2004；日本応用動物昆虫学会, 2006；XU et al., 2021）だけでなく、フランス、ハンガリー、ウクライナなどのヨーロッパ諸国（MARTINEZ, 1982；MARTYNOV et al., 2016；PAPP and ČERNÝ, 2017）でも確認されている。メス成虫が葉身内部に産卵し、孵化した幼虫は葉内を潜孔するため白い筋状の食害痕が発生する（図-1 左）。加藤（1949）は山形県内でネギ類を加害するハモグリバエ類にネギハモグリバエという和名を

与え、以後、本種は国内におけるネギ類の害虫として知られている。しかし 2016 年ごろから、従来のネギハモグリバエによる被害とは異なり、十数匹の幼虫が集団で葉身を食害することで葉身全体が白化する被害が日本各地のネギ圃場で確認されるようになった（図-1 右、徳丸・上杉, 2019）。両系統のミトコンドリア DNA の COI 領域を解析したところ、系統間の変異は約 1.2%（658 塩基中 8 塩基）であったため、以後、従来系統はバイオタイプ A、別系統はバイオタイプ B と呼ばれるようになった（徳丸・上杉, 2019；TAKAGI et al., 2021；TOKUMARU et al., 2021）。2016 年の初確認以降、数年のうちにバイオタイプ B の発生が東北から九州までの 40 都府県に拡大したほか、バイオタイプ A から B への置換が進んでいる圃場も多く、高木ら（2022）によると、茨城県で 2018～20 年にかけて 18 地点で採集されたネギハモグリバエ計



図-1 ネギハモグリバエの幼虫による食害痕のバイオタイプ間差（浦入・藤戸, 2026）

Rapid Expansion of the Distribution and Dominance of the Stone Leek Leafminer, *Liriomyza chinensis* (Diptera: Agromyzidae) Biotype B in Japan. By Chihiro URAIRI and Satoshi FUJITO

（キーワード：ネギハモグリバエ、バイオタイプ、系統間交雑、系統間競争、数理モデル）